

## 興味津々で見えています

昨日のことです。一年A組が朝の会を美術室で行っていました。見に行くと、いつも元気なH教諭が手を動かしながら、彼にしては珍しく静かに「おはようございます」と言っていました。すると、生徒たちは全員それに応えて手を動かし、これまた静かにあいさつをしました。そうです。一年A組では、日常の簡単な会話に手話を取り入れているのです。

美術室で朝の会を実施したのは、一時間目が美術だからです。授業にスムーズに入れるようにH教諭が判断しました。手話を取り入れて朝の会をしたのも彼の判断です。「学級に手話を取り入れる」と彼は以前から話していました。飛沫防止が叫ばれている今は、画期的なあいさつと言えるかもしれません。

学年が横に足並みをそろえながら、それでいて各学級には個性を発揮してほしいと、私は以前から思っていました。確かに、同じ学年として同一歩調で成長することは大切です。しかし、それだけでは学級が生まれた意義は半分です。学級の仲間との出会い、担任との出会いがあったわけですので、出会いの足跡として何かを残すべきだと思うのです。

そのため手話がふさわしいかどうかは、今はわかりません。一年後の一年A組の姿でわかるはずです。他の学級ではやっていないことに取り組んでいる一年A組を、私は今興味津々で見えています。

朝の会のその日の教師の話が、その日の予定、変更点、提出物であったり、前日の生徒のすばらしい姿の紹介であったりと、学校生活密着の内容になりがちですが、一年A組は学校とは全く関係のない手話から始まりました。

学校モードになりきれない生徒もいる中で、肩肘（かたひじ）張らない話題から入るH教諭はさすがベテランです。生徒たちも「今朝はどんな手話かな」と気楽な気もちで臨んでい

るような気がします。

(六月四日 記)

